

鄭樵『通志』六書略の「子母同声」について

高山亮太

1. はじめに

この論文では、宋の鄭樵の『通志』六書略の諧声字の分類の一つである「子母同声」について考察する。まず、六書と異なる造字法の分類を唱えた唐蘭の『中国文字学』が鄭樵の『通志』六書略について言及した部分、つまり現代文字学の初期の文献の宋代六書学についての言及について述べる。次に、『通志』六書略の概略、特にその中でも諧声（形声）の「子母同声」と現代文字学の「両声字」の類似の可能性について述べる。次にその「両声字」について、漢字と漢字系文字の両面から述べる。さらに、『通志』六書略の「子母同声」の例としてあげられた字について、「子母同声」とは実際にどのようなことなのか、先行の字書や韻書を参照しながら考察する。

2. 唐蘭『中国文字学』の言及

唐蘭は伝統的な造字法の分類である六書を批判して、異なる三書説（象形、象意、形声）を唱えた人物である。その著書である『中国文字学』（唐蘭1979）の「文字的構造」の章で三書説について述べているが、その中でも鄭樵の『通志』六書略について述べた部分が多く見られるのが特徴的である。

まず、「六書説批判」の項では鄭樵の「兼書説」について、鄭樵は許慎の六書説の欠点に気づかなかつたため、分類が難しいときに妥協案として生み出されたものであり⁽¹⁾、このような分類は六書説の基本的な考えと合わないものであると批判する⁽²⁾。たとえば「形兼声」（象形兼諧声）について原始文字である象形字は形声を兼ねるはずがなく、また諧声字は本来象形に由来するものであるため筋が通らず、二つを兼ねるものがあるならば分類をする必要がないとする。

「図画文字」の項では鄭樵が文字の点画から起源を探ろうとしたことを批判する⁽³⁾。

「象形文字」の項では鄭樵の分類法（唐蘭は「第一種」と分類する）を採用しつつも、「乱雑」であるとして整理している⁽⁴⁾。ここでいう「第一種」とは象形字をその表すものによって分類する分類法で、ほかに「第二種」（他に兼ねる造字法の種類による分類）、「第三種」（構造による分類）がある。鄭樵の分類が「乱雑」というのは、鄭樵の象形字の分類（「第一種」の分類のみ）は「正生」が十種、「側生」が六種の合計十六種であることをいう。

「形声文字」の項では鄭樵は形声字を「正生」と「変生」の二つに分け、さらに「変生」を「子母同声」、「母主声」、「主声不主義」、「子母互為声」、「声兼義」、「三体諧声」の六種に分類しているが、これらについて細かく批判する。まず「子母同声」と「子母互為声」については二つの声符からなる字とされているが、どちらか一方のほうが近い音であるはずであるとし⁽⁵⁾、「母主声」は部首の分類の誤りであり⁽⁶⁾、「主声不主義」は用例の数も少なく定義も不明瞭⁽⁷⁾、「声兼義」については形声字の声符は本来すべて意味を持ったものであるとし⁽⁸⁾、「三体諧声」は分析の誤りであるとする⁽⁹⁾。

このようにまとめると、唐蘭は鄭樵を批判的に見ているように見えるが、唐蘭1979:73で「文字学史上でも賞賛に値する」と評価していたり、「象形文字」の項では「乱雑」としながらもその分類法を採用していたりと一定の評価をしているのもうかがえる。おそらく唐蘭は自らの理論に先行する理論として鄭樵の説をとらえており、その説を修正しようとしていたのではないだろうか。これは「中国文字学史略」の項でも鄭樵を「文字学上の大進歩」と評価していることから証明される⁽¹⁰⁾。現代文字学の初期の人物である唐蘭が宋代の人物である鄭樵の説を参考にしたのは興味深いことである。

3. 鄭樵『通志』六書略の概略

そこで、鄭樵『通志』六書略はどのような文献であるのか概略を見ていきたい。六書略はその名に「六書」のつく通りに、部首によって分類した『説文』や『玉篇』とは異なって六書によって分類することを試みている。さらに六書をさらに細分化したことも特徴的である。たとえば象形字は「正生」(天物、山川、井邑、草木、人物、鳥獸、虫魚、鬼物、器用、服飾)、「側生」(象貌、象数、象位、象気、象声、象属)、「兼生」(形兼声、形兼意)の合計十八種に分類される。「正生」は具体的なもの、「側生」は抽象的なもの、「兼生」は他の造字法を兼ねるもので、それを表すものの種類によってさらに細分化している。このような細かい分類は後の楊桓『六書統』などの六書学の文献にも引き継がれた⁽¹¹⁾。ただし、そのような分類について後世からみた評価は、上記の唐蘭の厳しい評価が妥当だと思われる。ただし、その中で筆者が目撃したい分類があり、それは諧声(形声)の「変生」の「子母同声」である。この分類について唐蘭1979:105は「子母互為声」と一緒にして、より近い音の構成要素が声符であるとしているが、「子母同声」は二つの構成要素が同じ音を表す字、「子母互為声」は二つの構成要素が互いに声符となる字であり、同じように見なすことはできない。そしてこの「子母同声」の「二つの構成要素が同じ音を表す」という特徴が現代文字学の造字法の分類でいう「両声字」と一致するように思われるのである⁽¹²⁾。

またここで鄭樵の「子母説」についても述べる。これまでも鄭樵の形声の下位分類などに「子」と「母」が出てきた。これについて鄭樵は「論子母」と題した項で説明している。要約すると、「母」は形符、「子」は声符を指す。「母」と「子」という名称には「母」は生むことでは

きるが、「子」は生むことはできないという意味がこめられ、形符の「母」のみが部首となることができるということを指すようである。

4. 「両声字」について

ここでは、漢字と漢字系文字に存在する「両声字」について先行研究を参考として述べる。

まずは漢字の「両声字」について述べる⁽¹³⁾。

裘錫圭1988は「不能納入三书的文字」の一つとして「両声字」とし、ともに音符の二つの構成要素によって構成される字とする。例字は「𦉳」、「𦉴」などを挙げている。「𦉳」については仮借字に音符を加えたものとしている。また、「耻」（「恥」の異体字）、「𦉵」（「𦉶」の異体字）も形符が声符に置き換えられた結果、二つの構成要素が音符になったが、これは「耳」「𦉷」が音符とわからなかったためであり、実際は半記号半表音字であるとする。詹鄞鑫1991は形声字の「表音性文字附加表音符号构成的形声字」の中の「假借字附加表音符号构成形声字」とし、仮借字が本字とみなされて声符が加えられたものとし、例字に「𦉳」、「𦉴」、「𦉵」、「𦉶」、「𦉷」、「𦉸」などを挙げている。また、裘錫圭1988がこのような字を形声字とみなさなかったことについて、形符として用いられる「𦉹」の意味は仮借義であるという例を挙げて、仮借字であっても形符とみなすべきであり、このような字は形声字とみなすのが合理的だとする。張玉金1999は「表音法」の一つの「使用两个音符构成新字」、または「両声字」として、例字は仮借字に音符を加えた「𦉳」、形符を声符に変えた「𦉴」を挙げている。湖北2005は形声字をさまざまな角度から分類した中の一つの「按形声字生成时源字在形声结构中所起的作用分类」の「加注声符于声符」であり、もとの字が表音化（仮借）した後に声符を加えられて、もとの字が形符となったとする。例字は「𦉳」、「𦉴」を挙げている。李運富2011は「音音合体字」とし、例字は「𦉵」を挙げる。

次に、漢字系文字の「両声字」について述べる⁽¹⁴⁾。

漢字系文字では、壮文字と苗文字に「両声字」に相当する字が見られる。壮文字の「両声字」は周有光1998の「両声法」、陸錫興2002の「双声符字」、王鋒2003の「二声字」、覃曉航2010の「双声」にあたり、次のような字がある。

𦉵 fangz [fa:n³¹]（鬼）、𦉶 sang [θa:n²⁴]（高い）、𦉷 gaeuj [kau⁵⁵]（見る）、𦉸 rai [ɣai²⁴]（倒れる）、𦉹 deng [ten²⁴]（命中する）、𦉺 san [θa:n²⁴]（白米）

苗文字の「両声字」は、陸錫興2002の「双声符字」、王鋒2003の「二声字」にあたる。

𦉻 [to⁴⁴]（震える）、𦉼 [ɬ²²]（苗族の姓）

これらの定義については、周有光1998は二つの漢字を声旁（音符）としたものとする。陸錫興2002は「双声符字」を形声字の下位区分としているが、実際は形符がないため厳密には形声字といえないとする。表音作用を強化するためだけでなく、特殊な借音字として、他の形声字と区別するために二つの同音、あるいは近い音の声符で構成された字とする。王鋒2003は二つの音が同

じか近い漢字を組み合わせて構成される字とする。覃曉航2010は二つの漢字がともに声旁となる字とする。

まとめると、漢字の「両声字」はもともと仮借字であった字が形符と見なされて声符を加えられた字と形声字の形符を声符に置き換えられた異体字の二つがあり、おそらく実際は形声字として作られたものだが、結果として「両声字」となったものである。一方、漢字系文字の「両声字」は最初から二つの声符から構成される字として作られたようである。一見同じように見える両者も、まったく違った由来を持つ字であるということがわかる。

5. 鄭樵『通志』六書略の「子母同声」の考察

ここでは『通志』六書略の「子母同声」の全三十七字について、『通志』以前の字書や韻書である『説文解字』、『玉篇』、『広韻』、『集韻』、『類篇』の記述を参考にして、それぞれの字がどのような理由で「子母同声」と考えられたのかを明らかにすることを試みる。『通志』六書略の字形や義積について薄守生2012は『説文』、『玉篇』、『集韻』、『類篇』などを参考に行っているとするが、「子母同声」については主に『類篇』を参考にしたものが多く見られる。そのため、『類篇』については全文を引用し、本文と一致する部分に下線を引いた。また、一部の字は現行の『通志』六書略と他の字書類とで別の字になってしまっているものがあつた。これはおそらく『通志』がしばらく抄本の形で伝わったことに由来し⁽¹⁵⁾、そのときに誤られたものがそのまま版本となった時にも引き継がれたと思われる。本論文は鄭樵が「子母同声」とみなしたと思われる字体に従って考察することを目的としているため、これらの字については現行の『通志』六書略の字形に従わなかった。

1. 譽 枯沃切。急告之甚也。

『類篇』：「譽 枯沃切。急告之甚也。文一」(二上・告部)

『説文』は「从告、學省聲」と分析する。「譽」は溪通合一入沃⁽¹⁶⁾、「學」は匣江開二入覺、「告」は見通合一入沃。「譽」と「告」とは声母以外が一致する一方で、「學」とは声調しか一致しない。

2. 趁 丑忍切。走也。

『類篇』：「趁 丑忍切。走也。文一」(三上・辵部)

『集韻』によると「趁」は「趁」(『説文』：「趨也」)の異体字。「趁」は「丑忍切」だが準韻にある(「忍」は軫韻)⁽¹⁷⁾。『広韻』では「軫」小韻(丑忍切)は軫韻に属する。また『韻鏡』、『通志』七音略の韻図においても「軫」が軫韻に配置されており、諧声系列から考えると「趁」と「軫」

は同じ「夆」を声符としている。以上から開口の軫韻であると判断し、徹臻開三上軫とする⁽¹⁸⁾。「夆」は章臻開三上軫、「夂」は羊臻開三上軫。「夆」は「夆」と「夂」の両方とも声母以外一致する。

3. 𪔐 卽入切。説文：「𪔐𪔐、盛也。汝南名蠶盛曰𪔐。」

『類篇』：「𪔐 卽入切。説文𪔐𪔐、盛也。汝南名蠶盛曰𪔐。又叱入切、又質入切。文一、重音二」（三上・十部）

『通志二十略』（1995年、中華書局版）316頁の校勘記によると「𪔐」を「𪔐」（『説文』：「勺也」）にする版本もあるようだが、『説文』をはじめとする字書の記述により「𪔐」（『説文』：「𪔐𪔐、盛也」）が正しいことがわかる。また次の「𪔐」と「十」を構成要素にもつという共通点もある。「𪔐」は『広韻』では「昌汁切」（昌深開三入緝）、『集韻』では「卽入切」（精深開三入緝）、「叱入切」（昌深開三入緝）、「質入切」（章深開三入緝）があるが『六書略』に従い「卽入切」の精深開三入緝とする。「甚」は『広韻』では「常枕切」（常深開三上寢）、「時鳩切」（常深開三去沁）の二音がある。「十」は常深開三入緝。「𪔐」と「十」とは声母以外一致し、「甚」とは摂、呼、等が一致する。

4. 𪔐 籍入切。説文：「詞之𪔐矣。」

『類篇』：「𪔐 籍入切。説文詞之𪔐矣。文一」（三上・十部）

「𪔐」は従深開三入緝、「十」は常深開三入緝。「𪔐」は『広韻』では「子入切」（精深開三入緝）、「七入切」（清深開三入緝）の二音がある。「𪔐」は「十」と「𪔐」と声母以外一致する。

5. 𪔐 五故切。逆也。

『類篇』：「𪔐 五故切。逆也。从午、吾聲。文一」（十四下・午部）

現代の「両声字」でもよく例として挙げられる字である。『広韻』は「𪔐」、『集韻』は「𪔐」「午」「𪔐」と同じとする。「𪔐」は疑遇合一去暮、「午」は疑遇合一上姥、「吾」は疑遇合一平模⁽¹⁹⁾。「𪔐」は「午」と「吾」と声調以外一致する。

6. 𪔐 魚音切。呻也。

『類篇』：「𪔐 魚音切。説文呻也。文一」（三中・音部）

『説文』、『広韻』、『集韻』はともに「齡」を「吟」（『説文』：「呻也」）の異体字とする。「齡」は疑深開三平侵、「音」は影深開三平侵 B、「今」は見深開三平侵。「齡」は「音」と「今」と声母以外一致する。

7. 籛 於金切。小聲。又鄔感切。鍾病聲。周禮：「微音籛」。

『類篇』：「籛 於金切。小聲。又烏含切。説文下微聲。又衣廉切。小聲。又鄔感切。鍾病聲。周禮微音籛。又烏紺切。鍾聲小也。又於陷切。文一、重音五」（三中・音部）

「籛」は「於金切」（影深開三平侵 B）、「鄔感切」（影咸開一上感）の二音が記述されている。『広韻』では「烏含切」（影咸開一平覃）、「於陷切」（影咸開二去陷）の二音、『集韻』では「烏含切」、「烏紺切」（影咸開一去勘）、「於陷切」、「衣廉切」（影咸開三平鹽 B）、「於金切」、「鄔感切」の六音がある。「音」は影深開三平侵 B、「奮」は『広韻』では「於琰切」（影咸開三上琰 A）、「於念切」（影咸開四去禿）がある。「於金切」と「音」とは完全に一致し、「奮」とは声母、呼、等が一致する。「鄔感切」と「音」とは声母が一致し、「奮」とは声母、摂、呼、等が一致する。ここで二音を記述したのはなぜだろうか。「於金切」は「音」に近く、「鄔感切」は「奮」に近い。この字は「子母同声」ではなく「子母互為声」に置くべき字だったのかもしれない。

8. 𪔐 邱奇切。持去也。

『類篇』：「𪔐 丘奇切。持去也。文一」（三下・支部）

本文では「𪔐」となっているが、「𪔐」は『集韻』のみに見られ、義積（「𪔐𪔐多少不齊兒」）も異なることから、『説文』に「持去也」とある「𪔐」と思われる。「𪔐」は『広韻』では「去奇切」（溪止開三平支 B）、「居宜切」（見止開三平支 B）、「居綺切」（見止開三上紙 B）の三音があるが、「邱奇切」に従い、溪止開三平支 B とする。「奇」は「渠羈切」（群止開三平支 B）、「居宜切」（見止開三平支 B）の二音がある。「支」は章止開三平支。「𪔐」は「奇」と「支」と声母以外が一致する。

9. 𪔐 丘奇切。𪔐𪔐也。

『類篇』：「(𪔐) 𪔐 丘奇切。説文𪔐𪔐也。或作𪔐。又居僞切。疲極也。又古委切。重累也。文二、重音二」（九中・危部）

「𪔐 丘奇切。𪔐𪔐也。或作𪔐。文一」（三下・支部）

本文では「𪔐」となっているが字書に記述がなく、「𪔐」と思われる。『集韻』、『類篇』はともに

「𣪠」を「𣪠」（『説文』：「𣪠區也」）の異体字とする。「𣪠」は溪止開三平支 B、「器」は溪止開三去至 B、「支」は章止開三平支。「𣪠」と「器」とは声母、撰、呼、等が一致し、「支」とは声母以外が一致する。

10. 𣪠 株垂切。𣪠𣪠、不齊。

『類篇』：「𣪠 株垂切。𣪠𣪠、不齊。又渠羈切。垂也。文一、重音一」（三下・支部）

「𣪠」は知止合三平支、「垂」は常止合三平支、「支」は章止開三平支。「𣪠」と「垂」とは声母以外が一致し、「支」とは撰、等、声調、韻が一致する。

11. 𣪠 攀麋切。方言：「南楚之間、器破而未離謂之𣪠」。

『類篇』：「𣪠 篇夷切。器破也。又普鄙切。方言南楚謂器破未離曰𣪠、又部鄙切。齊楚謂豐曰𣪠、又匹寐切。文一、重音三」（三下・支部）

「𣪠 攀麋切。方言南楚之間、器破而未離謂之𣪠。文一」（三下・支部）

この「器破而未離」を表す字は『玉篇』や『広韻』では「𣪠」であり、「𣪠」は『広韻』では「𣪠」の異体字とされている。しかし、『広韻』の本文では「𣪠」となっており、「支」から「𣪠」の揺れが見られる。『集韻』や『類篇』では完全に混同され、「𣪠」も「𣪠」も同じ意味を表す字となっている。「六書略」では反切が「攀麋切」（「𣪠」の音）となっている。「𣪠」は滂止開三平脂 B、「比」は並止開三平脂 A、「支」は章止開三平支。「𣪠」と「比」とは声母と韻以外が一致し、「支」とは撰、呼、等が一致する。

12. 隸 郎計切。説文：「附著也」。一曰、賤稱。

『類篇』：「隸（隸） 郎計切。説文附著也。一曰賤稱。篆作隸。隸人、力智切。附也。又力結切。僕也。文二、重音二」（三下・隶部）

本文では「隸」となっているが『説文』で本字であり、「从隶、柰聲」と分析されている「隸」と思われる。「隸」は来蟹開四去霽、「柰」は泥蟹開一去泰、「隶」は羊止開三去至。「隸」と「柰」とは撰、呼、声調が一致し、「隶」とは呼、声調が一致する。

13. 隸 徒柰切。及也。引詩：「隸天之未陰雨」。从隶、臬聲。臬亦音怠。

『類篇』：「隸 徒耐切。及也。詩曰隸天之未陰雨。文一」（三下・隶部）

「隸 蕩亥切。及也。迨或作隸。文一」（七中・臬部）

「隸」について『広韻』、『集韻』（蕩亥切）は「迨」、『集韻』（待戴切）は「隶」の異体字とする。本文の記述のうち、「臬亦音怠」は他の字書から見つけられず、反切の「徒柰切」（定蟹開一去泰）もなかった。この反切は『説文』、『類篇』の「徒耐切」、『集韻』の「待戴切」（ともに定蟹開一去代）、『玉篇』の「徒改切」、『広韻』の「徒亥切」、『類篇』の「蕩亥切」（ともに定蟹開一上海）と異なる。「臬」は心止開三上止、「怠」は定蟹開一上海、「隶」は羊止開三去至。「隸」は「六書略」の記述に従い、「徒柰切」の定蟹開一去泰とすると、「隸」と「臬」とは呼しか一致せず、「怠」とは声母、摂、呼、等が一致し（「徒亥切」等の音ならば「怠」と完全に一致する）、「隶」とは呼と声調が一致する。鄭樵の意図を考えると、「隸」と「臬」では類似度が低くなってしまいうので音は「怠」ととるべきだろう。

14. 隸 羊至切。習也。又以制切。勞也。

『類篇』：「隸（隸隸）隸 羊至切。説文習也。籀文作隸、篆文作隸。隸、又以制切。勞也。又神至切。又息利切。文三、重音三」（三下・聿部）

「隸」の字形は『類篇』が初出で、『広韻』、『集韻』では「隸」「隸」となっている。「隸」は「羊至切」（羊止開三去至）、「以制切」（羊蟹開三去祭）の二音が記述されている。「匕」は幫止開三上旨、「矢」は書止開三上旨、「隶」は羊止開三去至。「羊至切」は「匕」と「矢」と摂、呼、等が一致し、「隶」とは完全に一致する。「以制切」は「匕」と「矢」と呼と等が一致し、「隶」とは声母、等、呼が一致する。7.「籛」の場合、二音が記述されているのはそれぞれの構成要素と音韻の類似度が異なっていたためと推測できたが、この字の場合は「羊至切」のほうが明らかに類似度が高く、理由がわからない。

15. 𩇛 莊持切。手足膚黑。

『類篇』：「𩇛 莊持切。手足膚黑。文一」（三下・皮部）

「𩇛」は莊止開三平之、「皮」は並止開三平支B、「𩇛」は莊止開三平之。「𩇛」と「𩇛」とは完全に一致し、「皮」とは摂、呼、等、声調が一致する。

16. 𩇛 當侯切。小穿也。

『類篇』：「𩇛 當侯切。小穿也。一曰割也。文一」（五中・豆部）

『集韻』は「𩇛」を「𩇛」の異体字とする。「𩇛」は端流開一平侯、「豆」は定流開一去侯。「𩇛」

は『広韻』では「其俱切」（群遇合三平虞）、「古侯切」（見流開一平侯）、「九遇切」（見遇合三去遇）、「古侯切」（見流開一去侯）の四音がある。このうち「其俱切」は地名（冤句県）、「古侯切」は姓である。鄭樵の意図を考えると、より近い音を選ぶべきなので、ここでは「古侯切」をとる。「駒」と「豆」とは撰、呼、等が一致し、「句」とは声母以外が一致する。

17. 𧄸 郎才切。至也、勤也。

『類篇』：「𧄸 郎才切。至也、勤也。文一」（五下・來部）

本文では「𧄸」となっているが字書にはなく、本文の記述から見ると『集韻』と『類篇』にある「𧄸」があてはまる。「𧄸」は来蟹開一平哈、「來」は来蟹開一平哈と近い。しかし「合」は『広韻』では「侯閤切」（匣咸開一入合）と「古沓切」（見咸開一入合）であり、「台」（定蟹開一平哈）のほうが明らかに近い音である。おそらく鄭樵が『集韻』や『類篇』の「𧄸」を「𧄸」と誤認したか、あるいは参照した版本に誤刻があったかのどちらかと思われる。また類似する「𧄸」や「𧄸」の影響もあったかもしれない。「𧄸」と「來」とは完全に一致し、「台」は声母以外が一致する一方、「合」とは呼と等のみが一致する。

18. 𧄸 浴哀切。説文：「強曲毛可以著起衣」。

『類篇』：「𧄸（𧄸） 陵之切。郷名。古省。又並郎才切。説文彊曲毛可以箸起衣。𧄸、又良脂切。牛駁文。又湯來切。右扶風𧄸縣。又謨交切。又謨袍切。𧄸或作𧄸。文二、重音四」（二上・聲部）（良脂切は『集韻』：44の「𧄸」〔「𧄸」「𧄸」の異体字〕の誤り）

『説文』は「从聲省、來聲」と分析する。本文の反切である「浴哀切」は他の字書にはなく、おそらく『説文』の「洛哀切」の誤りとする、来蟹開一平哈である。「來」は来蟹開一平哈、「聲」は『広韻』では「里之切」（来止開三平之）、「落哀切」（来蟹開一平哈）、「莫交切」（明效開二平肴）の三音がある。「𧄸」と「來」とは完全に一致し、「聲」の「落哀切」とも完全に一致する。

19. 𧄸 癡林切。説文：「木枝條𧄸儷也」。

『類篇』：「𧄸 癡林切。説文木枝條𧄸儷也。又䟽簪切。木枝扶踈兒。文一、重音一」（六中・林部）

「𧄸」は徹深開三平侵、「林」は来深開三平侵、「今」は見深開三平侵。「𧄸」は「林」と「今」と声母以外が一致する。

20. 𪗇 良刃切。獸名。似𪗇、身黃尾白。

『類篇』：「𪗇 良刃切。獸名。似𪗇、身黃尾白。文一」（十一下・𪗇部）

本文では「𪗇」となっているが、『集韻』と『類篇』では「𪗇」となっていて、次の「𪗇」との関係を考えて「𪗇」と思われる。「𪗇」は来臻開三去震、「𪗇」は来臻開三平真。「𪗇」は『広韻』では「陟衛切」（知蟹合三去祭）、「息晉切」（心臻開三去震）の二音がある。「𪗇」と「𪗇」とは声母、摂、呼、等が一致し、「𪗇」の「息晉切」とは声母以外が一致する。

21. 𪗇 渠營切。説文：「回疾也」。

『類篇』：「𪗇 渠營切。回疾也。从𪗇。營省聲。文一」（十一下・𪗇部）

『説文』は「从𪗇、營省聲」と分析する。「𪗇」は群梗合三平清、「營」は羊梗合三平清。「𪗇」は『広韻』では「陟衛切」（知蟹合三去祭）、「息晉切」（心臻開三去震）の二音がある。「𪗇」と「營」とは声母以外が一致し、「𪗇」の二音とは摂と呼が一致する。

22. 𪗇 非尾切。説文：「別也」。

『類篇』：「𪗇 符非切。山海經揄次山有鳥状如人面一足、名曰囊𪗇、冬見夏蟄、服之不雷。文一」（十四下・巴部）

「𪗇 攀悲切。鳥名。又非尾切。説文別也。又府尾切。又匹寐切。囊𪗇、鳥名。又平祕切。文一、重音五」（十一下・非部）

本文では「𪗇」となっているが『説文』に「別也」とある「𪗇」と思われる。しかし「𪗇」と「𪗇」の混乱は『広韻』から始まっていて、本来「𪗇」の字義である「鳥名」が『広韻』、『集韻』、『類篇』の「𪗇」の義釈にも見られる。しかし、この混同は「鳥名」だけで起こったものであり、「別也」は「𪗇」のみにある。「𪗇」は非止合三上尾、「非」は非止合三平微、「已」⁽²⁰⁾は羊止開三上止。「𪗇」と「非」とは声母、摂、呼、等が一致し、「已」とは摂、等、声調が一致する。

23. 𪗇 邊兮切。説文：「牢也。所能拘非也。从非陞省聲」。

『類篇』：「𪗇 邊兮切。説文牢也。所以拘非也。又邊迷切。又篇迷切。文一、重音二」（十一下・非部）

「𪗇」は幫蟹開四平齊、「非」は非止合三平微、「陞」は並蟹開四上齊。「𪗇」と「非」とは声調のみが一致し、「陞」とは摂、呼、等が一致する。

24. 𣦵 今作無。説文：「亡也。从亡、無聲。奇字作无。通於无者、王育説：『天屈西北爲無』」。
 『類篇』：「𣦵（無无） 武扶切。亡也。从亡、無聲。作無、奇字作无。通於无者、王育説天屈西北爲无。文三」（十二下・亡部）

本文の「無聲」は『説文』の「从亡、𣦵聲」から本来は「𣦵（無）聲」と思われる。ただし『類篇』でも「無聲」となっているため、もともと「無聲」であった可能性もある。「𣦵」は微遇合三平虞、「𣦵」は微遇合三上麌、「亡」は微宕合三平陽。「𣦵」と「𣦵」とは声母、摂、呼、等が一致し、「亡」とは声母、呼、等、声調が一致する。

25. 𣦵 里之切。説文：「蒙福也」。

『類篇』：「𣦵（賚） 里之切。家福也。或作賚。𣦵、又虚其切。禮吉也。落蓋切。賜也。文二、重音二」（十三下・里部）

本文の「蒙福也」は「家福也」の誤りと思われる。「𣦵」は来止開三平之、「𣦵」は曉止開三平之、「里」は来止開三上止。「𣦵」と「𣦵」とは声母以外が一致し、「里」とは声母、摂、呼、等が一致する。

26. 𣦵 居蚪切。説文：「相糾繚也。一曰、瓜瓠結り起、象形」。或作斗。

『類篇』：「𣦵 相糾繚也。一曰、瓜瓠結り起、象形。凡り之屬皆从り。或作𣦵。居蚪切、又居尤切。𣦵、又渠幽切。𣦵流、環繞也。り、又巨夭切。相糾也。文二、重音三」（三上・り部）

本文の「或作斗」の「斗」は「り」と思われる。『集韻』を見ると「𣦵」と「り」との関係は複雑である。「居蚪切」（見流開三平幽）では「𣦵」は「り」の異体字の扱いだが、「渠幽切」（溪流開三平幽）では「𣦵」が単独で現れ、「居尤切」（見流開三平尤）と「巨夭切」（群效開三上小）では「り」のみで「𣦵」はない。ここでは本文の「居蚪切」に従い、「𣦵」を「り」の異体字と見なし、同じ音とする。「𣦵」は見流開三平幽。「𣦵」は『広韻』では「落蕭切」（来效開四平蕭）、「力救切」（来流開三去宥）の二音がある。「𣦵」と「𣦵」の「力救切」は摂、呼、等が一致する。

27. 𣦵 祛尤切。𣦵也。

『類篇』：「𣦵（凋） 祛尤切。𣦵也。或作凋。凋、又尼猷切。又羌幽切。文二、重音二」（三上・り部）

本文は「𣦵」だが、『集韻』と『類篇』では「𣦵」であり、26.「𣦵」との関係も考えると「𣦵」

と思われる。「𣎵」は溪流開三平尤、「𣎵」は見流開三平尤、「𣎵」は曉流開三平尤。「𣎵」は「𣎵」と「𣎵」と声母以外が一致する。

28. 執 渠尤切。讎也。

『類篇』：「(仇) 執 渠尤切。説文讎也。一曰仇匹也。亦姓。或作執。文二」(八上・人部)
「執 渠尤切。讎也。又巨救切。文一、重音一」(十四下・九部)

『集韻』、『類篇』は「執」を「仇」の異体字とする。「執」は群流開三平尤、「求」は群流開三平尤、「九」は見流開三上有。「執」と「求」とは完全に一致し、「九」とは撰、呼、等が一致する。

29. 釘 郎丁切。撞也。

『類篇』：「釘 郎丁切。撞也。文一」(十四下・丁部)

「釘」は来梗開四平青。『広韻』では「令」は「力延切」(来山開三平仙)、「呂貞切」(来梗開三平清)、「郎丁切」(来梗開四平青)、「力政切」(来梗開三去勁)、「郎定切」(来梗開四去徑)の五音、「丁」は「中莖切」(知梗開二平耕)、「當經切」(端梗開四平青)の二音がある。「釘」と「令」の「郎丁切」とは完全に一致し、「丁」の「當經切」とは声母以外が一致する。

30. 鄧 中莖切。張也。

『類篇』：「鄧 中莖切。張也。文一」(十四下・丁部)

本文では「鄧」だが、『集韻』、『類篇』に「張也」とある「鄧」と思われる。「鄧」は知梗開二平耕、「登」は端曾開一平登。「丁」は『広韻』では「中莖切」(知梗開二平耕)、「當經切」(端梗開四平青)の二音がある。「鄧」と「登」とは呼と声調が一致し、「丁」の「中莖切」とは完全に一致する。

31. 𣎵 湯丁切。評議也。从𣎵、古文平字。

『類篇』：「𣎵 湯丁切。評議也。文一」(十四下・丁部)

「𣎵」と「𣎵」は「平」と「𣎵」(「平」の『説文』古文)の違いで、本来は同じ字だが、『集韻』では「𣎵」は「訂」の異体字、「𣎵」は「汀」の異体字とされ、本文でも「訂」(『説文』：「平議也」)の異体字である。「𣎵」は透梗開四平青。『広韻』では「平」は「房連切」(並山開三平仙A)、「符兵切」(並梗開三平庚)の二音、「丁」は「中莖切」(知梗開二平耕)、「當經切」(端梗開四平青)

の二音がある。「𠄎」と「平」の「符兵切」とは声母、撰、呼が一致し、「丁」の「當經切」とは声母以外が一致する。

32. 孳 七支切。人子腸也。

『類篇』：「孳 七支切。人子腸也。又祖似切。縣名。在犍爲。文一、重音一」（十四下・子部）

「孳」は清止開三平支、「此」は清止開三上紙、「子」は精止開三上止。「孳」と「此」とは声母、撰、呼、等が一致し、「子」とは撰、呼、等が一致する。

33. 孳 子之切。説文：「汲汲生也。从子、茲聲」。

『類篇』：「孳（孳） 子之切。汲汲生也。从子、茲聲。古作孳、籀作孳。文一、重音一」（十四下・子部）

「孳」は精止開三平之、「子」は精止開三上止。「茲」は『広韻』では「子之切」（精止開三平之）、「疾之切」（從止開三平之）の二音がある。「孳」と「子」とは撰、呼、等が一致し、「茲」の「子之切」とは完全に一致する。

34. 孳 陵之切。方言：「陳楚之間、凡人罍乳而雙産之孳」。

『類篇』：「孳（孳） 陵之切。方言陳楚之間凡人罍乳而雙産之孳。或省。文二」（十四下・子部）

「孳」は来止開三平之、「孳」⁽²¹⁾は曉止開三平之、「子」は精止開三上止。「孳」と「孳」とは声母以外が一致し、「子」とは撰、呼、等が一致する。

35. 疑 語其切。或也。説文：「从子止上、矢聲」。

『類篇』：「疑 語其切。惑也。从子止上、矢聲。徐鍇曰止、不通也。𠄎、古矢字、反匕。之幼子多惑也。又偶起切。度也。又於乞切。正立自定兒。儀禮婦疑立于席西。又鄂力切。文一、重音三」（十四下・子部）（於乞切は疔・魚乙切の前の乙の小韻）

『説文』の「惑也。从子止匕」によって本文の「或也」は「惑也」、「从子止上」は「从子止匕」の誤りと思われる。ただ、「匕」については『類篇』の時点で「上」になっているのでそれに由来するかもしれない。「疑」は疑止開三平之、「匕」は幫止開三上旨、「矢」は書止開三上旨、「子」は精止開三上止、「止」は章止開三上止。「疑」は「匕」、「矢」、「子」、「止」のいずれとも撰、呼、等が一致する。

36. 𪗇 渠希切。説文：「訖事之樂也」。

『類篇』：「𪗇 渠希切。説文𪗇也、訖事之樂也。又魚衣切。危也。汔也。又魚開切。又柯開切。文一、重音三」（五中・豈部）

「𪗇」は群止開三平微、「豈」は溪止開三上尾。「幾」は『広韻』では「渠希切」（群止開三平微）、「居依切」（見止開三平微）、「居豨切」（見止開三上尾）、「其既切」（群止開三去未）の四音がある。「𪗇」と「豈」とは摂と呼と等が一致し、「幾」の「渠希切」とは完全に一致する。

37. 𪗈 音鳩。𪗈大牝也。

『集韻』：「(𪗈𪗈) 𪗈 (𪗈) 博雅郭𪗈、牛屬、一曰牛無角也。或作𪗈、𪗈、𪗈 (科・苦禾切) (下八・八戈)

「𪗈 大牝謂之𪗈」(鳩・居尤切) (下平・十八尤)

『類篇』：「(𪗈𪗈) 𪗈 苦禾切。博雅郭𪗈、牛屬、一曰牛無角也。亦作𪗈、𪗈。𪗈、又唐何切、又徒禾切。𪗈、又居尤切。大牝謂之𪗈。文三、重音三」(二上・牛部)

この字については他の字のように『類篇』の記述を主に参考としたものではないと考えられ、さらに『集韻』と『類篇』で字形が異なっていて字形の分析に関連するため、『集韻』も全文を引用した。本文は「𪗈」だが、『集韻』の記述から見ると「𪗈」と思われる。また、「𪗈大牝也」の「牝」は「牡」の誤りと思われる。「𪗈」は見流開三平尤、「牛」は疑流開三平尤、「𪗈」は見流開三平尤。「𪗈」と「牛」とは声母以外が一致し、「𪗈」とは完全に一致する。この字だけ反切ではなく直音の「音鳩」であり、「𪗈」が『集韻』では「鳩」小韻（居尤切）に属することに由来すると思われるが、なぜ反切でないのかはわからない。

6. まとめ

「子母同声」の各字とその構成要素の音韻地位を表にまとめた。二つの反切が記述されたものは前者をとった。次に、この音韻の類似度を一致するものを○、紐（声母）の調音点が一致するもの（清濁のみが異なる）と韻が四声相配に対応するもの（声調のみが異なる）を△としてまとめた。

表1 「子母同声」の字と構成要素の音韻地位と類似度

	字	紐	攝	呼	等	声	韻	A	紐	攝	呼	等	声	韻	B	紐	攝	呼	等	声	韻
1	譽	溪	通	合	一	入	沃	告	見	通	合	一	入	沃	學	匣	江	開	二	入	覺
									△	○	○	○	○	○							○
2	珍	徹	臻	開	三	上	軫	及	羊	臻	開	三	上	軫	珍	章	臻	開	三	上	軫
										○	○	○	○	○							○
3	斟	精	深	開	三	入	緝	十	常	深	開	三	入	緝	甚	常	深	開	三	入	寢
										○	○	○	○	○							△
4	斟	從	深	開	三	入	緝	十	常	深	開	三	入	緝	聿	精	深	開	三	入	緝
										○	○	○	○	○		△	○	○	○	○	○
5	悟	疑	遇	合	一	去	暮	午	疑	遇	合	一	上	姥	吾	疑	遇	合	一	平	模
									○	○	○	○		△		○	○	○	○		△
6	齡	疑	深	開	三	平	侵	音	影B	深	開	三	平	侵	今	見	深	開	三	平	侵
										○	○	○	○	○		△	○	○	○	○	○
7	籛	影B	咸	開	三	平	侵	音	影B	深	開	三	平	侵	會	影A	咸	開	三	上	琰
									○	○	○	○	○	○		○	○				
8	敬	溪B	止	開	三	平	支	奇	群B	止	開	三	平	支	支	章	止	開	三	平	支
									△	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○
9	敬	溪B	止	開	三	平	支	支	章	止	開	三	平	支	器	溪B	止	開	三	去	至
										○	○	○	○	○		○	○	○	○		
10	致	知	止	合	三	平	支	垂	常	止	合	三	平	支	支	章	止	開	三	平	支
										○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○
11	岐	滂B	止	開	三	平	脂	比	竝A	止	開	三	平	脂	支	章	止	開	三	平	支
									△	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	
12	隸	來	蟹	開	四	去	霽	柰	泥	蟹	開	一	去	泰	隸	羊	止	開	三	去	至
									○	○	○	○	○								○
13	隸	定	蟹	開	一	去	泰	臬	定	蟹	開	三	上	海	隸	羊	止	開	三	去	至
									○	○	○	○									○
14	隸	羊	止	開	三	去	至	隸	羊	止	開	三	去	至	矢	書	止	開	三	上	旨
									○	○	○	○	○	○		○	○	○	○		△
15	齠	莊	止	開	三	平	之	留	莊	止	開	三	平	之	皮	竝B	止	開	三	平	支
									○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○
16	駒	端	流	開	一	平	侯	句	見	流	開	一	平	侯	豆	定	流	開	一	去	候
									○	○	○	○	○	○		△	○	○	○		△
17	給	來	蟹	開	一	平	哈	來	來	蟹	開	一	平	哈	台	定	蟹	開	一	平	哈
									○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○
18	齠	來	蟹	開	一	平	哈	來	來	蟹	開	一	平	哈	齠	來	蟹	開	一	平	哈
									○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○
19	琴	徹	深	開	三	平	侵	林	來	深	開	三	平	侵	今	見	深	開	三	平	侵
									○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○
20	癡	來	臻	開	三	去	震	舜	來	臻	開	三	平	真	凡	心	臻	開	三	去	震
									○	○	○	○	△			○	○	○	○	○	○
21	癡	群	梗	合	三	平	清	營	羊	梗	合	三	平	清	凡	心	臻	開	三	去	震
									○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○
22	豈	非	止	合	三	上	尾	非	非	止	合	三	平	微	已	羊	止	開	三	上	止
									○	○	○	○		△		○	○	○	○		○
23	陸	幫	蟹	開	四	平	齊	陸	竝	蟹	開	四	上	齊	非	非	止	合	三	平	微
									△	○	○	○		△							○

24	霖	微	遇	合	三	平	虞	霖	微	遇	合	三	上	麋	亡	微	宕	合	三	平	陽	
									○	○	○	○		△		○	宕	○	○	○		
25	盞	來	止	開	三	平	之	𦉳	曉	止	開	三	平	之	里	來	止	開	三	上	止	
									○	○	○	○	○			○	○	○	○	○		△
26	𦉳	見	流	開	三	平	幽	𦉳	見	流	開	三	平	尤	𦉳	來	流	開	三	去	宥	
									○	○	○	○	○			○	○	○	○			△
27	咻	溪	流	開	三	平	尤	休	曉	流	開	三	平	尤	𦉳	見	流	開	三	平	尤	
									○	○	○	○	○			○	○	○	○			○
28	執	群	流	開	三	平	尤	求	群	流	開	三	平	尤	九	見	流	開	三	上	有	
									○	○	○	○	○			△	○	○	○			△
29	釘	來	梗	開	四	平	青	令	來	梗	開	四	平	青	丁	端	梗	開	四	平	青	
									○	○	○	○	○			○	○	○	○			○
30	釘	知	梗	開	二	平	耕	丁	知	梗	開	二	平	耕	登	端	曾	開	一	平	登	
									○	○	○	○	○				○					○
31	釘	透	梗	開	四	平	青	丁	端	梗	開	四	平	青	平	竝	梗	開	三	平	庚	
									△	○	○	○	○			○	○					○
32	孛	清	止	開	三	平	支	此	清	止	開	三	上	紙	子	精	止	開	三	上	止	
									○	○	○	○		△		△	○	○				
33	孛	精	止	開	三	平	之	茲	精	止	開	三	平	之	子	精	止	開	三	上	止	
									○	○	○	○	○			○	○	○				△
34	孛	來	止	開	三	平	之	𦉳	曉	止	開	三	平	之	子	精	止	開	三	上	止	
									○	○	○	○	○			○	○	○				△
35	疑	疑	止	開	三	平	之	矢	書	止	開	三	上	旨	子	精	止	開	三	上	止	
									○	○	○					○	○	○				△
36	譏	群	止	開	三	平	微	幾	群	止	開	三	平	微	豈	溪	止	開	三	上	尾	
									○	○	○	○	○			△	○	○				△
37	牝	見	流	開	三	平	尤	牛	疑	流	開	三	平	尤	𦉳	見	流	開	三	平	尤	
									△	○	○	○	○			○	○	○				○

そこで、「両声字」との比較のために「子母同声」で挙げられておらず、先行研究で取り上げられた漢字の「両声字」の例字と類似度の比較を試みた。

表2 「両声字」の字と構成要素の音韻の類似度

字	A	紐	攝	呼	等	声	韻	B	紐	攝	呼	等	声	韻
眞	己	△	○	○	○	○	○	其	○	○	○	○		△
耻	耳		○	○	○	○	○	止		○	○	○	○	○
幹	軌	○	○	○	○	○	○	干	○	○	○	○		△
虜	虜	○	○	○	○	○	○	乎	△	○	○	○	○	○
𦉳	員	○		○	○	○		云	○	○	○	○	○	○
虞	虜		○	○		○		呉	○	○	○		○	
静	青		○	○				争		○	○		○	

鄭樵の「子母同声」は文字の中からそれぞれの構成要素が声符とみなせる字を選んだものだろう。一方、現代の「両声字」は成り立ちからしっかりと考察されているという違いがある。二つの表から両者の類似度はかなり近いように見える。しかしこれは鄭樵の分析法から現代の「両声字」を分析したものにすぎない。反対に現代の「両声字」の分析法から鄭樵の「子母同声」を分析する必要もあるだろう。また今回は中古音から分析を行ったが、成り立ちから考察する場合には上古音からの分析も必要になる⁽²²⁾。今後、鄭樵の「子母同声」についてこのような点から考察することで、「子母同声」と「両声字」の関係をさらに明らかにすることができるだろう。

注

- (1) 「鄭樵六書略用許慎の理論，作許氏の諍臣，以子之矛，攻子之盾，確有許多創獲，在文字學史上是值得推許的。可惜他還是給許氏的義例縛住了，沒有看見它本身的缺點，因此，在不容易分類時，只好用「聲兼義」一類遷就的辦法，一個文字就同時可兼兩書了」(唐蘭1979：73)。
- (2) 「這種分類，和六書說的基本思想不合，假使象形是原始文字，就不應該兼聲，諧聲文字又本來就兼于形，形兼聲在理論上就講不通。凡是分類，需要精密而無例外，要是分爲四類，而每一類依舊得牽纏其餘三類，這種類就大可以不必分。可是由於六書本身的缺點，這種分類法從宋朝到現在，大家都還沿用着」(唐蘭1979：74)。
- (3) 「有些學者想從一點一畫上去尋討文字的根源，鄭樵的起一成文圖說：(引用略)如其文字的起源，真是這樣機械，一切文字就都可用公式來替代，文字的歷史就簡單多了。可是鄭樵所舉，大都不成字，這種系統，沒有事實的根據，只是一種玄想罷了」(唐蘭1979：80)。
- (4) 「我們所需要的，只有第一種分類方法，不過，鄭樵所分太雜亂了，現在只分四類」(唐蘭1979：87)。
- (5) 「子母同聲，跟子母互為聲，是兩邊都可以認為聲母的字，不過總有一邊是更切近的」(唐蘭1979：105)。
- (6) 「母主聲一類，只是分部的不當」(唐蘭1979：105)。
- (7) 「至於主聲不主義一類，鄭氏纔舉四個字作例，(略)界說似乎不很明瞭」(唐蘭1979：105)。
- (8) 「總之，形聲字的聲符所代表的是語言，每一個語言不論是擬聲的，述意的，抒情的，在當時總是有意義的，所以每一個形聲字的聲符，在原則上，總有它的意義，不過有些語言，因年代久遠，意義已茫昧，所以，有些形聲字的聲符也不好解釋了」(唐蘭1979：107)。
- (9) 「關於三體或四體的諧聲，後人分析做二形一聲，三形一聲，和二聲，共有三類，這實在是錯誤的。我認為形聲字在造字時，只有一形一聲，(當然有些聲母本身已是形聲字，)絕對沒有同時用兩個形或兩個聲的」(唐蘭1979：107)。
- (10) 「鄭樵第一個撇開說文系統，專用六書來研究一切文字，這是文字學上一個大進步」(唐蘭1979：21)。その一方でその分類については「瑣屑拘泥，界畫不清，固然是失敗的，但不是無意義的」という評価であるのも、「文字の構造」の章と一致する。
- (11) 党懷興2003：95-108。
- (12) 「子母同声」と「両声字」の類似については葉玉英2005、蘭碧仙2010も言及している。
- (13) 本文で言及したほかには、袁家麟1988(「双声符号」)、何琳儀2003(「双重標音」)、葉玉英2005(「双声符号」)が古文字における「両声字」について言及している。
- (14) 本文で言及したほかには、聶檣2013が字喃、漢字系文字とは異なるが白小麗2012がトンパ文字における「両声字」の例を挙げている。
- (15) 『通志二十略』(1995年、中華書局版)「前言」6頁。
- (16) 音韻地位は声母、撰、呼、等、声調、韻の順。
- (17) 真、軫、震、質韻(開口)と諄、準、稕、術韻(合口)は『切韻』ではそれぞれ同じ韻であったものが『広

韻』、『集韻』で開合によって分けられた韻である。『広韻』と『集韻』ではその分類に異同があり、「𪛗」小韻のように一方で開口、もう一方で合口の韻に分類されたものがある。この異同の原因については錯簡、底本の違い、方言の影響、音韻変化の影響などの諸説がある（雷励2012）。この問題については他に李葆嘉1996、邵晶2004、王進安2005を参考にした。

- (18) 「𪛗」の「丑忍切」については「趁」の『広韻』や『説文』の「丑刃切」との関連も考えられる。「趁」は『広韻』では他に「直珍切」（澄臻開三平真）、「尼展切」（娘山開三上獮）もあるが、「丑忍切」に相当する音はない。また『広韻』では「𪛗」小韻（丑忍切）に所属する字は「𪛗」のみである。
- (19) 「吾」は『広韻』では「五加切」（疑假開二平麻）の音もあるが、これは「金城郡允吾県」という地名の音であるので省略した。
- (20) 下の構成要素は各字書によって「己」、「巳」、「已」の揺れがあり、『集韻』ではこの三種が全て見られるが『説文』の「从非巳」に従う。ただ「己」、「巳」、「已」の音韻地位はいずれも止韻であり声母が違うだけである（「巳」には志韻の音「羊吏切」もある）。
- (21) 「𪛗」の省略の可能性もある。「𪛗」は『広韻』では「里之切」（来止開三平之）、「落哀切」（来蟹開一平哈）、「莫交切」（明效開二平肴）の三音がある。「𪛗」と「𪛗」の「里之切」とは完全に一致する。
- (22) 「子母同声」の字には『広韻』や『集韻』が初出の字もあるため、これらの字を上古音で分析すべきかという問題もある。

参考文献

- (漢) 許慎撰、(宋) 徐鉉校定『説文解字』（1963. 中華書局）
- (梁) 顧野王著『大宋廣會玉篇』（1987. 中華書局）
- (宋) 陳彭年等重修『校正宋本廣韻』（2007. 藝文印書館）。
- (宋) 丁度等編『集韻』（1985. 上海古籍出版社）
- (宋) 司馬光編『類篇』（1987. 上海古籍出版社）
- (宋) 鄭樵『通志二十略』（王樹民点校1995. 中華書局）。
- 白小麗2012. 「东巴文双声符现象初探」、『中央民族大学学报（哲学社会科学版）』第1期：147-153頁。
- 薄守生2012. 「《六书略》反切的来源问题」、『中南大学学报（社会科学版）』第4期：160-163頁。
- 党懷興2003. 『宋元明六书学研究』。中国社会科学出版社。
- 何琳儀2003. 『战国文字通论（订补）』。江蘇教育出版社。
- 胡北2007. 「形声字形成途径初探」、『古籍研究』2007卷上：102-111頁。
- 蘭碧仙2010. 「郑樵《六书略》简论」、『西南科技大学学报（哲学社会科学版）』第3期：33-37頁。
- 雷励2012. 「重探《集韵》转移小韵」、『广西社会科学』第4期：145-149頁。
- 李葆嘉1996. 「《广韵》真淳部反切下字类隔刍论」、『古汉语研究』第1期：12-14頁。
- 李国定1997. 「训诂探赜」、『厦门大学学报（哲社版）』第2期：7-12頁。
- 李運富2011. 「《说文解字》的析字方法和结构类型非“六书”说」、『中国文字研究』第十四辑：138-146頁。
- 龍宇純1960. 『韻鏡校注』。藝文印書館。
- 陸錫興2002. 『汉字传播史』。語文出版社。
- 呂浩2007. 『篆隸萬象名義校釋』。学林出版社。
- 聶禎2013. 「《新编传奇漫录》中的双声符喃字」、『东南亚纵横』2：49-53頁。
- 裘錫圭1988. 『文字学概要』。商務印書館。
- 邵晶2004. 「真淳部收字浅论」、『吕梁教育学院学报』第2期：61-65頁。
- 覃曉航2010. 『方块壮字研究』。民族出版社。
- 唐蘭1979. 『中国文字学』。上海古籍出版社。

- 王鋒2003. 『从汉字到汉字系文字——汉字文化圈文字研究』。民族出版社。
- 王進安2005. 「真淳韵的分合比较及其上古音溯源」、『福建论坛（人文社会科学版）』2005年專輯：217-218頁。
- 葉玉英2005. 「论双声符研究中的若干理论问题」、『厦门大学学报』第1期：119-124頁。
- 袁家麟1988. 「汉字纯双声符字例证」、『南京师大学报（社会科学版）』第2期：85-89頁。
- 詹鄞鑫1991. 『汉字说略』。遼寧教育出版社。
- 張玉金1999. 「汉字造字法新探」、『古汉语研究』第4期：45-50頁。
- 周有光1998. 『比较文字学初探』。語文出版社。